

防災「はじめる」プロジェクト

代表者 長澤 怜真 創造工学部 創造工学科3年

1. 目的と概要

このプロジェクト事業は、香川県民と香大生の防災意識向上、熊本の災害を風化させずに被災から得た教訓を伝えることを大きな目標に活動している。本プロジェクトの構成員は香川大学防災士クラブに所属し、日頃から各種訓練やボランティア活動に参加している。今年度の活動では新型コロナウイルス感染症の影響により活動に制限がかかる中でもできる活動を行った。プロジェクト名にあるように、活動の対象とする方々に実際に防災行動をはじめってもらうことに重点を置いた活動を考案し、実行した。様々な活動を行い、代表的なものは動画制作、冊子制作、学祭での活動であり、詳細については後述する。

2. 実施期間（実施日）

令和3年6月20日から 令和4年2月28日まで

3. 成果の内容及びその分析・評価等

私たち「防災はじめるプロジェクト」は、上記の目標を達成するために様々な活動を行い代表的な活動3つについて振り返る。

1つ目は、動画制作活動である。

熊本大学工学部公認災害ボランティアサークルの「熊助組」の皆さんの撮影協力を得て、熊本にクマのぬいぐるみ「はじめ」を送り、彼らの活動場所である、熊本県八代市坂本町で取材・撮影を行った。動画のテーマは熊助組が伝えたい「被災後時間が経過しても復興していない地域があること」と、私たちの伝えたい「被災者の声を聞き、防災を始めてもらうこと」である。被災された地域の方には、被災時の家の周りの様子、自身に起きた具体的な被害、しておけばよかったことなどを伺い、被災者支援を行った方には、新型コロナウイルス感染症蔓延による復興への影響、街の復興の様子、被災地、被災者の変化などについて伺った。これらのインタビューに加え、ナレーションやクマのぬいぐるみを用いて動画にストーリー性を持たせたり、香川県での被災事例を紹介したり、親しみやすいイラストやアニメーションを多用することで、香川県の地域の方や香川大学の学生に動画に関心を持ってもらえるように工夫を行った。

約10か月に及んで構成の計画や撮影，編集，音声収録，イラスト素材作成などを行い，令和4年3月に「未来の被災者へ」（18:08）が完成した。

災害を経験したことがない人が大多数である中で，実際に被災された方の貴重な被災経験を伝えることができる成果物ができたと考える。

しかし，新型コロナウイルス感染症による，サークル活動の制限により完成が計画より大幅に遅れたため，広報活動をまだ十分に行えていない。これにより活動の評価を行うことは非常に難しいが，上記の目標を達成できるような動画が作成できたと考える。メンバー全員が動画制作に関する知識や経験が無かったため，全員で調べながら0から制作を行ったが，動画に関する意見は全員で出し合い，作業はそれぞれの得意分野で役割を分担することができたのは良い点であると考えます。

また，熊本大学の学生とオンラインミーティングを通して，防災に関することやコロナ禍での活動や部員のモチベーション維持方法などについても意見交換を行うことができ，熊助組との関係を継続するという目標を達成することができ，私たち自身にとっても良い経験となった。

現在，成果物の広報活動について香川大学学生生活支援グループと広報室に掛け合っている。今後は成果物の広報を行い，動画を見てもらうことで，被災イメージを持ち，自身の防災行動を「はじめる」きっかけを提供し，より多くの地域の方や香大生に影響を与えたいと考える。

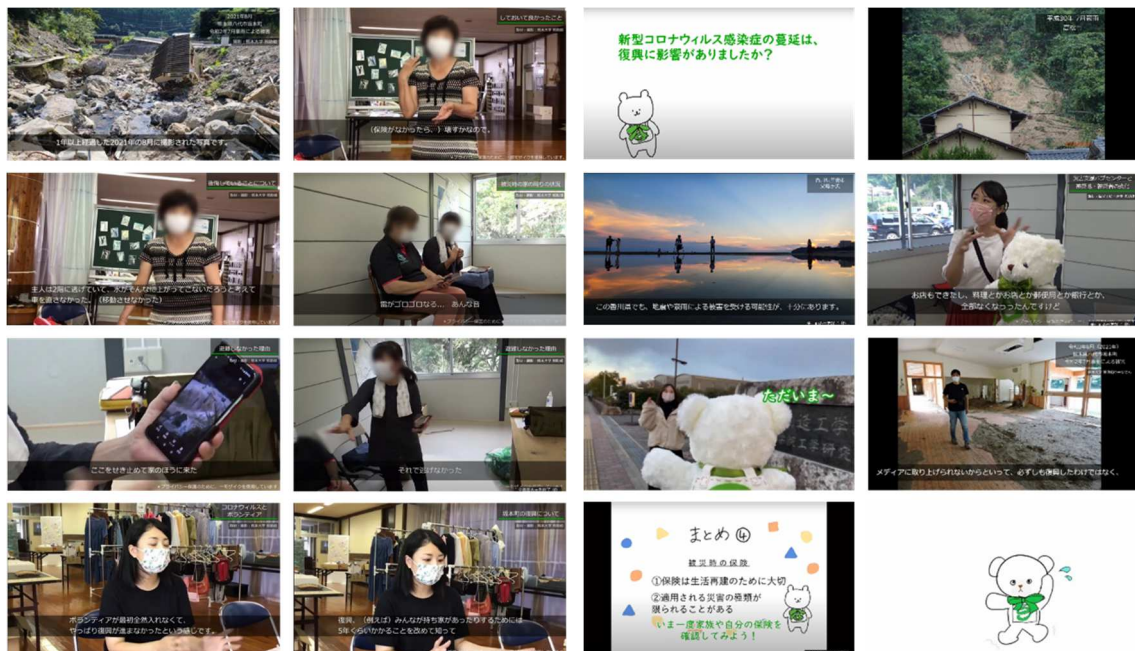


図1 「未来の被災者へ」（18:08）

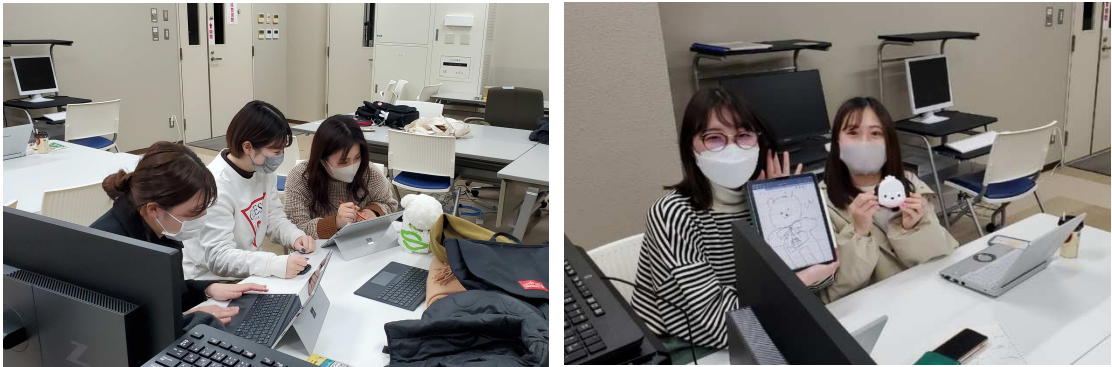


図 2 動画制作活動の様子

2つ目は、冊子制作活動とそれらを用いた防災啓発活動である。

計画当初は小学生向け防災教室を開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の影響により小学校に出向くことができなくなったため、このような状況下でもできる活動として、補助教材となる冊子制作に活動内容を変更した。

冊子は、玄関などに置いておき、いつでも持ち出せるようにして有事の際の手助けとなることや、災害について考えてもらい実際に防災活動を「はじめる」きっかけになることを目的として作成した。災害時に判断に迷うことを事前に記入しておけるような仕様になっている。自治体などが作成しているものなどを参考に案を出し合い作成し、指導教員にもアドバイスをいただき修正を重ね完成させた。

小学生以下を対象としていたため、情報の取捨選択や、実際に自分の身に置き換えて考えられるような質問を入れるなどの工夫を行った。また後半には保護者へのメッセージや保護者自身で記入してもらおうページを設けている。自主性の高い子どもをターゲットとしているものの、保護者も巻き込むことで地域防災力の向上を目指した。



図 3 作成した防災ハンドブック

冊子作成後、これらを用いた防災啓発活動も行った。令和3年11月3日にサンメッセ香川で行われた、認定NPOの法人わははネット様が主催ママ∞フェスタ2021&ファミリー防災フェスティバルに参加した。冊子を用いて、計71組約200名の子どもたちやご家族と一緒に「我が家の防災計画を立てるお手伝い活動」を行った。新型コロナウイルス感染症の影響で小学生を対象として活動とすることが出来ず、対象が未就学児に変わったため、フリガナと補助イラスト4枚で未就学児に対応した。参加者からは、活動に対して暖かい声や、「防災について考えるきっかけとなった」、「一度記入すれば有事に安心して対応できる」など意見をいただいた。

活動を通して、冊子の改善点や冊子を用いた活動で留意しておくべき点などを把握でき、より良い活動にしていくための指標を得ることができたと考える。保護者からは防災に関する質問を多くいただき、中には要支援者の避難についてのご相談もあり、大学での学びを生かして助言を行うことができたと考える。

地域の方や子供たちと交流でき、私たち自身が楽しく活動できた点が良かった点である。



図4 防災イベントでの防災計画を立てるお手伝い活動

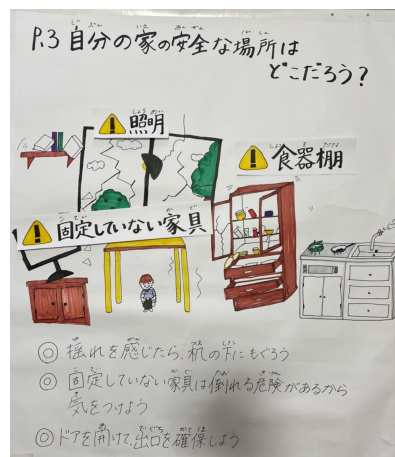
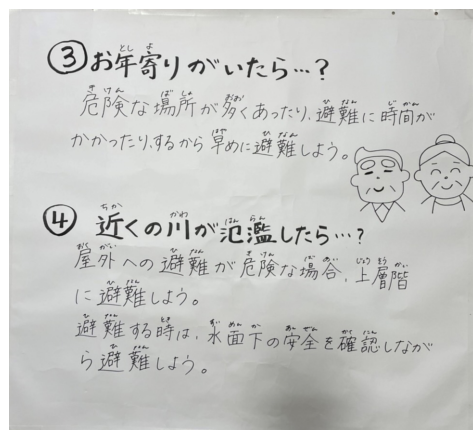
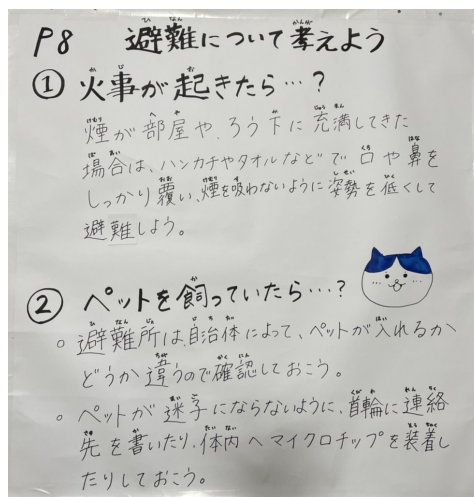
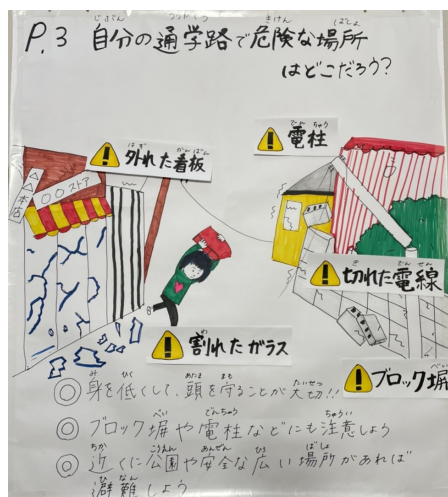


図 5 冊子演習用補助イラスト

3つ目は、香川大学大学祭での制作物の展示と標語コンクールの開催である。

熊本大学の熊助組さんに協力のもと、被災の経験や被災地でのボランティア活動、復興の様子などをテーマにパネルを作成し、学祭で展示した。防災にあまり関心のない学生にも展示を見てもらうために、同時並行で防災に関することをテーマに標語コンクールを開催した。これは、優秀3作品を選び、作者にアルファ米おにぎりを贈呈するというもので、パネルをヒントに標語を考えてもらうことで、展示パネルの閲覧を促した。学際が行われた2日間で、学部・学年を問わず香大生約50人にご応募いただいた。

香川大学大学祭自体の参加者が少なかったこともあり、私たちが期待していたほどパネルを閲覧してもらうことはできなかったが、事前に人を集める対策を講じていたために多くの香大生にパネルを閲覧してもらうことができたと考える。展示パネルは再利用が可能なので、作成したものは今後の活動に活用することで、より多くの人に閲覧してもらえるように努めていく。

応募作品の中には実際に防災行動を始める決意表明のようなものもあり、微力ながら私たち防災「はじめる」プロジェクトの目標を達成できたことを実感し、活動意義を強く実感することができた。



図 6 標語コンクール全 46 応募作品

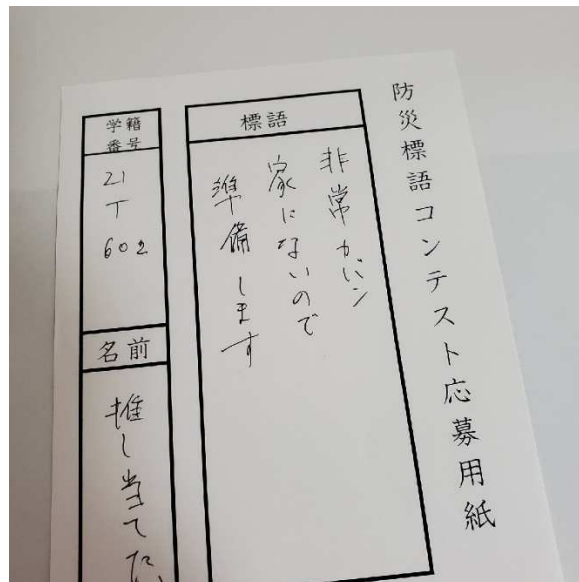


図 7 「はじめる」応募作品

4. この事業が本学や地域社会等に与えた影響

防災イベントにおいて約 200 名の子どもやご家族に防災ハンドブックを使用していた
 だき、「防災に対する関心が高まった」という意見を頂くことができるなど、地域の方の
 防災意識向上に貢献できたと考える。

香川大学大学祭においても学生に防災について考える機会を提供し、防災行動を始め
 る決意表明をしていただき、学生の防災を「はじめる」きっかけになれたと考える。

5. 自分たちの学生生活に与えた影響や効果等

活動を通して、自分たちが想像していることを形にすることができるようになったと
 考える。具体的には、パワーポイントで冊子を作ったり、動画を制作することができたり
 想像しているものを形にできるようになった。また、コロナ禍で活動に制限やかかる
 中で、その時々に応じて私たちにできること考え活動するなど、状況に応じた活動を計
 画することができるようになった。さらに、熊本大学の方と関わることで私たち自身が
 より被災地や被災された方についてより詳しく学ぶことができた。

6. 反省点・今後の展望（計画）・感想等

活動の反省点は、2点あると考える。

1点目は、学祭で人を集められなかったことである。学祭では、私たちが想像してい
 るより学生が体育館に入ってこなかったため展示パネルを多くの人に見てもらうことが

できなかった。閲覧促進のために実施した標語コンクールであるが、投票箱を1つしか作っておらず学生を待つだけであったことが反省点であると考え。今後同じような活動があれば、投票箱を複数個作り、食堂や講堂など学生が多くいる場所で能動的に動くことで参加を促し、より多くの学生に対し影響を与えたいと考える。

2点目は申請当初の計画の見通しが甘かった点である。新型コロナウイルス感染症の影響はプロジェクト申請時に考慮していたが、想定が甘く、防災教室が実施できない、使用したい動画素材を撮影できないなど多くの課題に直面した。しかし、そんな状況下でも代わりにできる活動を考えたり動画内容を変更するなど、状況に対応しながら活動を行うことができた。

今後の活動については、成果物である防災ハンドブックを用いた防災啓発活動による地域貢献や、作成した動画の防災活動への活用、今回の活動で習得した動画制作技術を活用し私たち自身で撮影を行い発信したいと考える。

また、熊本地震が起こってからボランティアとしてかかわってきた熊本大学熊助組との関係を継続していきたいと考える。

7. 実施メンバー

代表者	長澤 怜真	(創造工学部3年)		
構成員	松本 陽菜子	(創造工学部3年)	佐藤 由菜	(創造工学部3年)
	石坂 茉央	(創造工学部2年)	藤原 渉生	(創造工学部2年)
	新谷 有沙	(創造工学部2年)		

8. 執行経費内訳書

配分予算額		199,927円		
執行経費（品目等）	数量	単価(円)	金額(円)	備考
高速起動ラミネーター 外			42,224	
ぬいぐるみ 外			5,086	
ソニー ビデオカメラ	1	30,470	30,470	
荷物運送料（高松市～熊本市）	1		994	
資料印刷 一式			27,500	
コクヨプリント用紙A3	2	1,628	3,256	
荷物運送料（熊本市～高松市）			1,160	
合計			110,690	